

NEWS LETTER

都市史研究

THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN

VOL.

55

2007
0509

風薫る五月となりましたが、皆様におかれましてはますますお元気でお過ごしのことと存じます。さて、長らくのご無沙汰となってしまいましたが、都市史研究会のニューズレター55号をお届けいたします。

本号では2007年1月から3月までの活動の内容と今後の予定について報告いたします。具体的には1月、2月、3月に行われました例会について発表者から寄せられました報告要旨を掲載いたします。また巻末には科研費基盤研究A「都市アイデアの生成と変容に関する研究」において、本年3月に行われました中国・ベトナム調査旅行の報告記も掲載いたします。なお4月に行われました第63回都市史研究会例会（第9回とらっど3研究会）につきましては、次号のニューズレターで報告する予定です。

都市史研究会では科研費基盤研究「とらっど3」の出版企画『シリーズ伝統都市』と連動して、昨年以來、毎月一回と言う異例のペースで研究会を行ってきました。おかげさまでどの回も無事盛況に終えることが出来ています。今回の企画はあと数回を残すのみとなりましたが、引き続き例会へのみなさまのご参加をお待ちしております。

第60回都市史研究会例会（第6回とらっど3研究会）

1月27日、東京大学出版会第一会議室において、第60回都市史研究会例会（第6回とらっど3研究会）が行われました。当日は高橋慎一郎氏、本康宏史氏、高村雅彦氏による報告がなされ、活発な討議が行われました。当日の報告要旨は以下のとおりです。

報告要旨 中世都市周縁の関所と寺社勢力

日本の中世都市は一般に市壁が欠如していたと言われるが、都市の出入り口に あたる周縁の場所に関所が設置され、市壁的機能を果たしていた。京都の東北部にあった朽木口は、延暦寺に属する高野の蓮養坊が支配していた。都市周縁の出入り口が、寺社勢力およびその配下の在地人集団の活動によって維持されていたのである。このことは、中世都市における分権的側面を示すもので、絶対的「都市領主」が欠如する中で、都市支配の一部を寺社勢力が担っていたことが明らかになった。

高橋慎一郎（東京大学史料編纂所）

報告要旨 軍都金沢

「軍都」の視点から、陸軍第九師団が駐留した金沢を事例に、伝統都市＝城下町がどのように変容していったのか、権力による社会＝空間の再編とその意味するところを報告した。とりわけ、城郭を中心とする城下町構造の「軍都」への再編の様相を分析。くわえて陸軍軍縮にともなう連隊廃止／移転の過程で、都市権力と都市住民（地域社会）がいかなる対応を示したかを紹介した。報告後、共通テーマ「権力とヘゲモニー」に関して、どのように論集に反映させるかなどの議論があった。

本康宏史（石川県立歴史博物館）

報告要旨 中国共産主義のアイデア

1949年の中華人民共和国設立から、1957年の人民公社化・第一個五カ年計画完了までの9年間における都市建築の活動に着目し、長い封建社会から脱して中国社会主義が目指した理想像を解明しようとした。そこには、共産主義のスローガンや強権的なコントロールには左右されない自由で夢のある都市と建築へのまなざしがあったことを明らかにし、そのうえそれが文化大革命後にあっても中国の都市建築の基盤やモデルとなったことを示した。

高村雅彦（法政大学）

第61回都市史研究会例会（第7回とらっど3研究会）

2月17日、東京大学出版会第一会議室において、第61回都市史研究会例会（第7回とらっど3研究会）が行われました。当日は熊遠報氏、池田嘉郎氏、青木祐介氏による報告がなされ、活発な討議が行われました。当日の報告要旨は以下のとおりです。

報告要旨 胡同 —19～20世紀における北京住民の生活空間と「糞道」を中心に—

明清時代の北京には、いくつかの大通りに数多くの通路が繋がり、幅が異なるこうした通路の両側に多くの四合院が一定の規則によって配列し、一つの胡同（町）となっていた。鳥瞰図を見れば、北京の内城と外城は、無数の胡同からなる迷宮のような構造であった。20世紀前半まで百万以上の人は、壁に囲まれる各々の四合院に日常生活を営んでいた。ところが62平方キロに及ぶ巨大な北京には、常にライフラインの供給不足という問題が存在した。ゴミの収集、特に住民の排泄物に即してみれば、近代的な下水施設が整備される20世紀50年代まで糞夫・糞廠経営者という糞便処理業者に処理された。糞夫・糞廠経営者という外来者集団は、糞便の収集範囲に縄張りをし、更に「糞道」の権利対象となった住民・住宅を不動産のように扱い、独占し、業者の中で「糞道」という所有秩序を成立し、売買、分割、相続、抵当、貸借などを行っていた。都市のライフラインという機能を果たす自覚を持っていない「糞道」の所有者・経営者・従業者は、数百年間、実質的に北京の下水処理を行っていたが、胡同という生活の場を離れない住民は、糞便処理業者の乱暴でずさんな処理に悩まされ、日常的に臭い空気環境に強いられていた。それにもかかわらず、糞便処理業者にとって住民も官府・市政府も無力的存在であった。

熊遠報（早稲田大学）

報告要旨 大家族としてのモスクワ

スターリンによる1930年代のモスクワ改造について分析した。前半部では都市の相貌の変化について、新しい時空間の創出という観点から論じた。具体的には道路・地下鉄・建築に焦点を当てた。後半部では、そうした時空間の再編を支

えたアイデアとは、「家族」ではなかったのかという仮説の下に、住宅・公園・河岸・パレードについて分析した。報告では当時の映画を紹介することで、モスクワの変貌やそのアイデアについて体感してもらうべく努めた。

池田嘉郎（新潟国際情報大学）

報告要旨 横浜

本発表では、幕末・明治初期の横浜の都市形成を素材とし、新田が広がる開港以前の原風景から、幕府による開港場建設、幕末大火後のお雇い外国人による都市計画を経て、「日本人市街地と外国人居留地」「商人派の関内と地主派の関外」という複数の二重構造が重層する中心市街地が形成される過程をたどった。あわせて市街地完成後のライフライン整備のなかで、「共有物」の概念を媒介に都市の公共性が認識されていく状況を指摘した。

青木祐介（横浜都市発展記念館）

第62回都市史研究会例会（第8回とらっど3研究会）

3月9日、10日の二日間にわたり、第62回都市史研究会例会（第8回とらっど3研究会）が行われました。当日は橋場弦氏、青島陽子氏、竹ノ内雅人氏（以上、9日）、横山百合子氏、亀長洋子氏、森田貴子氏、清水和裕氏、山下惣一氏（以上、10日）による報告がなされ、活発な討議が行われました。当日の報告要旨と発表題目は以下のとおりです。なお9日の会場は東京大学文学部法文1号館115教室、10日の会場は東京大学出版会第一会議室でした。

報告要旨 アテナイ民主政における紛争解決と「居合せた人々」の役割

強制権力を行使する官僚制・警察組織をもたないアテナイ民主政において、一般市民は、紛争の当事者と特に顔見知りでない場合であっても、証言の提供、自発的加勢、捜査への協力、当事者への助言、被害者の一時的保護などの形で、積極的に紛争解決に関与することが期待された。彼らの活動範囲は、私的な利害調整とは異なる次元において、ポリス社会独自の公共圏を形成しており、有力者間のアゴーンというモデルに収斂されない市民の行動原理をそこに読み取ることができる。

橋場 弦（東京大学）

発表題目 ペテルブルグーロシア帝国の先端都市

青島陽子（東京大学）

発表題目 社家

竹ノ内雅人（東京大学）

報告要旨 解体する権力

近代移行期における権力の解体過程については、政治権力の解体とそれに伴う武士身分の解体という側面と、地域社会における近世的な社会的権力の解体・変容という二つの位相が考えられる。本報告では、明治前半期の都市東京における区長一戸長という重層的な都市行政制度を素材として、旧来の政治的権力の担い手である武士層が、地域社会の利害の実現や抑制という機能を求められるのではないかという仮説を提示し、二つの位相の統一的な把握を試みた。

横山百合子（東京都公文書館）

報告要旨 キオスのジュスティニアニ「家」～中世ジェノヴァ人居留地の「商人家族」

本報告では中世ジェノヴァ人史上最も個性的な「商人家族」といえるジュスティニアニ「家」の人的結合を解明する前提として、中世ジェノヴァ人の行動様式の傾向、居留地であったキオス島支配の歴史的展開、姓のシステムにみる中世ジェノヴァの「家」の特徴について説明した。そして今後公証人登記簿や居留地行政記録を分析し、これら三つの前提すべてが絡む形で、商業・本国と居留地・家族といった観点から海洋都市国家ジェノヴァの商業民が重視した人的結合の一側面を明らかにすることを予告した。

亀長洋子（学習院大学）

報告要旨 不動産と池田家

近世期の武家地地域は、近代以降、新しく不動産として登場してきた。本報告は、江戸の面積の約6割を占めていたとされる武家地地域の内、東京府荏原郡大崎村下大崎（現、東京都品川区東五反田）の旧岡山藩主池田家の所有地を取り上げ、大名下屋敷から宅地へ変換され、不動産へと変容する過程を明らかにすることを目的とした。①池田家大崎所有地の経過、②上地、③華族世襲財産法と大崎邸、④所有地の宅地化と分譲、について検討した。

森田貴子（横浜市立大学）

報告要旨 バグダード：宗派街区争乱と二重権力

766年に建設されたアッバース朝の首都バグダードは、10世紀初頭になると帝国の解体に伴って社会的経済的な苦境に陥った。従来から緊張関係にあったスンナ派とシーア派の住民は、シーア派を奉じるブワイフ朝軍事政権のバグダード入城を契機として、武力闘争を開始し、以後100年間にわたって断続的な宗派对立が継続した。統治権力の変化の元で、両派住民は特定街区への集住をすすめ、街区壁の建設やそれぞれの宗派的儀礼の施行もあって、バグダードは、宗派ごとの孤立した街区群へと解体していった。

清水和裕（九州大学）

次回以降の研究会のお知らせ

なお、下記の例会予定は、やむを得ない事情により変更になる場合があります。例会につきましては、毎回メールでもお知らせしますので、その都度ご確認ください。

第64回都市史研究会例会（第10回とらっど3研究会）

日時 2007年5月12日（土）10時～

会場 東京大学出版会会議室

10:00～ 小野将氏 「都市と宗教権力」

11:00～ 工藤晶人氏 「オラン」

13:00～ 横田冬彦氏 「王都論」

14:00～ 杉森玲子氏 「売場」

15:00～ 宇佐美隆之氏 「道」

16:00～ 岩淵令治氏 「藩邸」

日時 2007年5月13日（日）10時～

会場 東京大学出版会会議室

10:00～ 飯島みどり氏 「アミーゴ」

11:00～ 近藤和彦氏 「社会的結合論」

13:00～ 高澤紀恵氏 「カルティエ」

14:00～ 野口昌夫氏 「装飾と権力空間」

15:00～ 山根徹也氏 「都市と革命（ベルリン）」



[東京大学出版会の場所]

フエとベトナムのラストエンペラー —中国・ベトナム調査旅行記—

初田香成（東京大学）

ベトナムのラストエンペラー

ベトナムのラストエンペラーをご存知だろうか。阮（グエン）朝の第13代皇帝バオ・ダイ（保大）帝がその人である。バオ・ダイ帝はフランス植民地下の1926年（即ち昭和元年！）1月に傀儡王朝の皇帝に即位、日本の敗戦を背景としたホー・チ・ミン率いるベトミンの8月革命により、1945年8月に退位している。これにより阮朝は幕を閉じるのだが、中国のラストエンペラー同様、退位してからバオ・ダイ帝はきわめて数奇な一生をたどることになる。ホー・チ・ミンによって新政府の最高顧問に任命されるものの、それを嫌って香港に亡命、フランスの支援で1949年には親仏政権の国家元首としてベトナムに返り咲く。しかしその後、自ら指名した首相によって1955年に退任に追い込まれ、クーデターを起こすも失敗、フランスに亡命する。彼は結局カンヌの近くで余生を送り、1997年に激動の生涯を閉じている。

なぜバオ・ダイ帝のことを知ったかと言うと、話はフエの玉山公園にPHAN THUAN AN先生という方を訪ねた時にさかのぼる。PHAN先生は『The Citadel of HUE』という本を書かれたほどのフエの歴史の専門家、現在は退職して公園（というより庭園の趣き）の一面に家族と住みながら悠々自適の生活を送っておられる。我々一行はこのPHAN先生にフエで調査をするにあたって挨拶をするために訪ねたのであった。先生は突然の来訪にも関わらず暖かく迎えてくれ、というか、こういう突然の来訪者には慣れっこなのであろう、池を中心に手入れの行き届いた公園を一巡りし、その後、傍らの家に招き入れて、諄々とその解説をしてくださった。建物から家具、食器や古文書、刀にいたるまでいずれも先祖伝来の由緒正しい品々であり、その説明は微に入り細に入るものであった。

一時間以上は先生自ら解説をしてくださったであろうか、多少時間が気になりだしたところ、先生の縁者が阮朝の皇族だったことを教えていただいたのだった。先生によれば奥様のひいおじいさん（おじいさんだったかもしれない）が高級官僚で、皇族と結婚していたのだと言う。とすれば冒頭のバオ・ダイ帝と同様、阮朝滅亡から革命にかけて、先生の御家族がいかに激動の日々を迎えたか、想像するのは難くない。かつての都城（城壁に囲まれた旧市街）から歩いて20分ほどのこの土地で、彼らはどのような思いでこの公園を守ってきたのだろうか。旧王朝の人々に興味を抱いたのには、こういう理由があったのである。旧皇族の係累を目の当たりして、改めて現状の公園を見回すと、その静謐さが逆に近い過去の激動をまざまざと示している気がした。しかし実は我々がこうした歴史に翻弄される個人の姿を思い浮かべたのはこれ

が最初ではなかったのである。



（バオ・ダイ帝：中央奥の傘の下の人物、出典：『Wikipedia』）

夕涼みする人々

フエは1805～1832年の28年間を費やして初代皇帝のザーロン（嘉隆）帝、二代皇帝のミンマン（明命）帝（子沢山で有名で、その名を冠した精力ドリンクがあるという……）の二代にわたって建造された阮朝の首都である。要するに欧米列強の進出が迫っている頃、欧米の技術も利用して風水に基づく都市を造ってしまったわけで、世界で最も新しい都城と言えるかもしれない。旧市街はフォン川の北側に位置し、その内部は2.5km四方の城壁に囲まれて都市域をほぼ包含し貴族や市民の居住区もあった「都城」と、その内部南側に置かれ朝廷の施設・役所を含む0.6km四方の「皇城」、皇帝の住まいで王家のための私的領域である「紫禁城」の三重構造からなっている。世界遺産にも指定されている皇城には大勢の観光客が訪れる一方、都城内部には一般の人々が多く住み、市場や商店街など普段着の町が広がっている。

フエに着いた初日、一行は皇城東側の街区を歩いた。実はそれまで滞在していたハノイでは大田省一さん（東京大学生産技術研究所）というベトナム建築・都市の専門家が案内してくださったのだが、飛行機のスケジュールの関係でこの日は大田さんを除いたメンバーでの街歩きとなった。先達がいないと途端に丸腰になる一行ではあったが（道に迷っている我々を見かねて見ず知らずの方が声をかけてくれる始末）、この街歩きは楽しかった。それまでスケジュールを詰め込んでいたせいもあるし、その前にいたハノイの、人を人と思わないようなバイク集団の中に放り出されたような騒々しさに比べ、その穏やかさが身にしみたこともあるが、何より目的のない街歩きというのが良かったのだと思う。

皇城から歩いて程近いところなのに、一帯には緑の豊かな戸建て住宅地が広がっていた。と言っても一戸一戸はそれほど大きいわけではなく、道から家の中の一部がのぞけてしまうくらいであり、間に商店や食堂、何かの修理工場などが散在している庶民的な町である。しかし土地の使い方に余裕があるのだろう、どことなく町に流れる空気が穏やかなのだ。そして何よりそれを感じさせるのが、人々の路上での夕涼みであった。暑い国の町歩きは早

朝と夕暮れ時に限るとというのが僕の持論だが、日中の暑さも和らぐ夕飯前のひと時を彼らは路上にベンチを出して思い思いに過ごしているのだ。それはアスファルトに覆われた現在の日本ではできない贅沢な時間の過ごし方に見えた。またあるところでは路上に祭壇を組んで食べ物をお供えし、法衣らしきものを着た男性が集まっている風景に出くわした。たぶん法事だろうという結論に達したのだが、人々が集まり手を合わせている姿が印象的であった。路上に自然と人々が集まり交歓している風景、某先生は「昭和30年代の風景」と仰っていたが、町のあちこちに人々がたまれる余白があるとも言おうか、何とも心が和むひと時であった。

しかし城壁の外に出ようと、ドンバ門と呼ばれる昔からの門を出たところで、こうした我々の安寧は唐突に破られてしまう。門の上にコンクリート製のトーチカがそびえているのだ。フエはかつての国境である北緯17度線近くに位置し、ベトナム戦争の際にはその奪取を狙って激戦が繰り広げられたという。第二次大戦を生きながらえた紫禁城内の建物も、ほとんどはこの時代に焼失している。とすれば今まで歩いてきた街区に住んでいた人々も、こうした戦禍を被らなかつたはずはない。聞けば1968年のテト攻勢によりベトコンにほぼ市中全域が占領された際には、解放勢力による南ベトナム政府関係者の虐殺が行われ、今も現在の政府に不信感を持つ市民が少なくないと言う。ここでも日常風景の穏やかさとのギャップに戸惑う自分がいたのだった。



(ドンバ門の上のトーチカ：京谷友也氏撮影)

フエの戦後

かようにベトナムでは「戦後」が手の届くところにある。ベトナム戦争が終結したのが1975年、ちなみに私が生まれたのが1977年だから、ベトナムの戦後とほぼ同じ時代を生きてきたことになる。しかもこの間、ベトナムにはカンボジア侵攻や中越紛争があり、「ドイモイ」があったのだ。

玉山公園や夕涼みする人々を普段目に入る「囿」とすれば、PHAN先生の何気ない話やドンバ門にそびえるトーチカは「囿」の背後に隠れる「地」とでも言おうか。都市創建時から続く人々の日常の営みと近い過去の激動、そんな両者が併存し、時に反転して目の前に現れてくる都市。そしてその現在にいたるまでの激動は、帝国主義の手がアジアに伸びつつある19世紀に、時代遅れとも言える首都が建設されたときから定めづけられていたのかもしれない。フエにはそんな思いをいだかされる。

こんなことを言うと自分の想像力のなさを露呈するだけかもしれないが、現代の出来事だからこそ我々を揺さぶるストーリーというものがあるように思われる。現代都市史を研究している研究者は少ないが、こんなところにも現代都市史研究の醍醐味はある。

ドンバ門その後

余談だが、ドンバ門のすぐ近くにあった喫茶店はとても感じのよい店だった。我々はベトナム式コーヒーを頼んだだけだったが、コーヒーが冷めないように湯煎の器を一緒に出してくれたり、言葉が通じない我々のために事前に自分の手に値段を書いておいてくれたりと、かゆいところに手の届くサービスで、得体の知れない外国人グループを何かと気遣ってくれたのだ。しかもそのコーヒーはほろ苦さと甘い練乳の組み合わせが絶妙で、値段も安価なものだった。

実際、ここに限らずベトナム人は商売の勘が良いと思わされる。我々が雇ったドライバーはみな時間に正確だったし、空港で入った店は店じまいをしていたところだったにも関わらず嫌な顔一つせず商品を見せてくれ、笑顔を向けてくれたのだった。小さなことだけれど、こんなことでも旅人の気分は弾んでくるものなのである。

[付記]

本エッセーはとらっど3における科研A「都市アイデアの生成と変容に関する空間論的研究」のメンバーで、本年3月4日から12日まで中国・ベトナムを調査した際の記録の一部です。

News Letter 都市史研究 Vol. 55

2007年5月9日発行

事務局：〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内

レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科）

編集担当：初田香成（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）

横山百合子（千葉経済大学経済学部経済学科）

News Letter 都市史研究